

おばあちゃんの清らかな愛

松本侑壬子・ジャーナリスト

セックス・ショップの“看板娘”になったおばあちゃんの話—と言えば、何やらグテものじみて聞こえるかもしれない。だが、これはまた、途方もなく清らかな愛の物語でもある。まるで古典文学の「天使のような娼婦」を連想させるヒロインを演じるのは、1960年代のロンドンのポップ・アイドルだったマリアンヌ・フェイスフル。個人的にも麻薬中毒などの波乱の人生を克服、魅力的な60代トップランナーとしてスクリーンに戻ってきた。もちろん、あの不滅の青春映画『あの胸にもういちど』（1968年）の革ジャンのバイク姿ではないけれど。

ロンドン郊外の小さな町に住む中年主婦マギー（フェイスフル）は、重病の孫のために住む家も手放し、切り詰めた生活をしている。医者からはさらに「6週間以内にオーストラリアで特別な手術を受けなければ、命の保障はない」と宣告される。一人息子トム夫婦には莫大な渡航・治療費の当てはない。孫を救いたい一心のマギーは、通りかかった歓楽街ソーホーで「接客係募集」の張り紙を見て、その店「セクシー・ワールド」に足を踏み入れる。オーナーのミキ（ミキ・マノイロヴィッチ）は、「接客係」の意味がわかってない世間知らずの主婦マギーを追い返そうとするが、ふと触ったその手の柔らかさに考えを変える。

その店の「接客」とは、壁の向こう側に立つ男を手によって絶頂に導くことだった。壁に空けられた小さな穴のわきに座り、ワックスを塗った手で行う作業！ 奇想天外なこのサービスは、「東

京直輸入」とせりふにもあるが、（私もむかし、新宿・歌舞伎町での体験談を聞いたことがある、怒るよりも笑ってしまった！）、法律には触れない性産業なのだろうか。マギーは仕事の内容を聞いて驚き、一度は退散しかかるが、孫のためと思い直して覚悟を決める。

窓のない小さな個室で壁穴の向こうの客の顔も見ることなく、一生懸命に孤独な仕事に励むマギー。部屋には花を飾り、エプロン、ポットのお茶も持参する。マギーにはただ孫の医療費を稼ぐための少しでも割りのよい仕事であり、心を込めて働かだけだ。壁の向こうではマギーの柔らかい手により男たちの歓喜の雄叫びが続き、カメラが向こう側に回ると、なんと部屋の前には順番を待つ客の長蛇の列が！ “手のひらイリーナ”の源氏名ですっかり店の看板になったマギーの右手は腱鞘炎になるが、それでも今度は左手で頑張るのだ。こうしてオーナーの信用も得て、いよいよ孫を海外での治療に送り出すためのまとまったお金を前借りすることができた。

マギーは、家族にも近所の奥さん仲間にも、この仕事は絶対に秘密にしてきた。だが、大金を理由も言わずに持ち帰った母親に疑問を抱いたトムは、ついに秘密を突き止める。狂ったように母親を責めるトム。だが、これまでマギーとは犬猿の仲だった嫁が立ち上がった…。

マギーのしたことは、社会的に見てどうなのか。稼いだ金は汚いのか、カンケーない！のか。こんな境遇で、思いがけない愛を得たマギーの“普通の中年女性”の最高の笑顔が、その答えである。



英仏独など5ヵ国合作映画（103分）／サム・ガルバルスキ監督

『やわらかい手』

12月より Bunkamura ル・シネマにてロードショー

